少女小説

郷里

永代美知代

「ては御機嫌よう！」

「お手紙を是非ねえ！」

『忘れちゃ嫌よ、ねえ屹度！』

寮の譜彼の、斯うした言葉を、まるで夢のやうな氣持ちで聞き流して居た妙子は、たゞもうボッとして俥に乘つた。

テラースの兩側から、かぶさるやうに枝を張つた葉櫻の、綠涼しい綠門をくゞつて、俥は威勢よく驅けて行く。

ふと氣がついたやうに、妙子が後を振り向くと、何時の間に校門を出たものか、懷しい友の影も無い。赤い練瓦の塀さへも、はるかの彼方に見えなくなつてゐるのであつた。

『あゝもう！』

湧き返る涙をそつと、リンネルの手巾におさえて、妙子は今更らのやうに、せぐり來る悲しみに泣いた。

「ハ、キトクスグ　カヘレ」

思ひ掛け無い電報に胸打たれたのは、つい昨日の、それも夜に入つて、寮の小窓の下に親しい友達と一緒に、故郷戀しい唱歌を歌つて居た時であつた。

「まあ私、如何しませう！」

突然紙を顏にあて當てゝ妙子は泣き伏した。ローマの頸元に結んだ巾廣の水色リボンが烈しいないぢやくりに搖れた。

『如何なすつて？　え？　え？　妙子さん？』

『何か變つたお知らせなのでせう、ね、如何なすつたの？』

傍から親切に聞かれゝば聞かれる程、妙子はかなしさが込みあげて來て、容易くは口も利き得ない。

『泣いてたんぢや仕方が無いわ、ね、屹度悲しいお報知なのでせう？』

親しい親しい、眞の姉妹と契つた直子は、妙子の顏を覗き見なから寮をさすつた。

『母樣が危篤なんてすもの、私全く如何しませう！』

『まあねえ！』

一同は互に顏を見合せて同じやうに涙の催す眼を伏せた。

『お氣の毒ですのねえ——私本當に驚きました』

黑い布を頭から被つた異國の年若い尼さんが、悲しい電報の事を聞き傳へて、哀れな少女を慰さめにと、靜かに傍へ寄つて來た。

『先生！』

妙子はこの外に何にも云ふ事が出來なかつた　母にも似て物やさしい尼さんの寂しい、同情に滿ちた

様子を仰ぎ見ただけで、もう胸一杯塞がるやうな氣持かして、又しても熱い涙の玉が、ぽたり、ぽたり、止め途も無くはふり落た。

『何時御出立の御積りですの』

『今夜にも！』

妙子は斯う答へ度かつた。そして即坐に出立し度いと思つた。

矢鱈に胸が騒いで、一刻一時も猶豫しては居られない。ならう事なら、西に二百三十里の道を、飛んでも行き度い程に氣がせかれる。

だけれども妙子には弟がある――つい此春上京して、曉星中學に入つたばかりの幼い弟がある。電報は同じやうに母の危篤を報せて、同じやうに小さな胸を痛めて居ることであらう。幼い丈けに如何して可いか途惑をついて、思ひ惱みもしてゐやう――妙子はこの可憐な弟と相伴つて、郷里へ行かねばならないのである。それには色々打合せの必要もあつた。曉星中學へ電話もかけなければならぬ。荷物の整理も幾らかしなければ、立つ事は出來ないのである。

『明日出立致します』

妙子は思い決したやうに云ひ切つた。

『御道中惡なくいらつしやいますやうにね』

語尾は震えて、やつと聞き取れるか聞き取れない程の低い聲である。妙子は幽かに感謝のおもひを眼に云はせて首垂れたが、つと差し出した尼さんの手を執つて、ヒシと握り締めた。

異國の少女とこそ生れたれ、妙子は師として姉として、この年若い尼さんの情に親しんだ。懐しさは同じ大和の血を受けた直子に次いで、かりそめの別離ではあるけれど、今別れ行く事の悲しさに堪へ得ぬのであつた。

小さな行李一つに何彼を詰め込む間も、妙子は夢のやうな心地であつた。

『本當に歸るのかしら？』

又しても思ひまどはれた。

『ハヽ、キトクスグカヘレ』

疑ひも無く故郷の父から發しられた電報である。だけれども誰が斯うした報知を豫期するものぞ！

妙子は悲しさに取亂れた頭を振つて、若しや何かの間違ひでは無からうかとも考へて見た。

『夏やすみには又逢ひませうねえ、それまで體を大事に、病はぬ樣にして頂戴！』

斯う手を握り合つて、莞爾りお笑ひなすつた母樣の悲愛に滿ちたお顏が目前にちらついて、妙子は如何しても、病床に横はつた、病みやつれた母樣を想像する事が出來ないのである。

『だけども、だけども、急病なら仕方が無いわ、明日朝出立つて歸つて、それで可いのかしら？　若しや間に合はないで、お目にかゝれなかつたら……』

妙子はふと考へて身を振はせた。居ても立つても居られぬ氣持にくづをれた。

『妙さん、妙さん、荷物は私が造へるから、あなたは暫らく落着いてらつしやいよ』

友のために甲斐しく萬端の支度を調へた直子は、夜を通して妙子の傍に何彼と云ひ慰めた。

空か白むと直ぐに妙子のために頭髪をとかした直子は新らしいクリーム色のリボンを蝶々に結んで、藤模様の派出な友禪モスリンの單衣に、コバルトの袴を着けさせた。そうして一切の準備が出來て了ふと、ついと立つて妙子の前から姿を隱した。

『直子さん／／、もう愈々妙子さんは行つておしまひですよ』

誰かと注意して呼びかけても、直子は悲しい別離を目のあたり見るのが苦しくて、わざとに逃げて到頭出ては來なかつた。

たゞもうぼつとして取りのぼせた妙子は、何をして居るのか、如何して居るのか、それさへ解らぬらしく、直子の姿の見えない事など氣にとめなかつたのである。俥に乘つたのも夢心地なら、何時校門を出たものか知らなかつたが、行李を前に、膝の上に信玄袋を持ち添えて、六月のさわやかな朝の街を、ゴム輪に搖られて行く妙子は、誰の眼にも旅行く少女と一眼に知れた。

『まあもうお郷里へ！　可いわねえ』

行き逆ひざまに、斯う事情を知らぬ少女達に羨まれながら、俥はやがて新橋へ着いた。

『お切符をお買ひ申しませうか』

手を執つて、妙子を助けおろして、車夫は命令を待つた。

『さうねえ』

答へる間も、妙子の眼は群集の中に配られた。

『姉さん！』

パッとした妙子の前に、曉星の制帽を手に持つた弟の光二が立つた。

『僕先刻から隨分待つたよ、だつて姉さんてば遲いんだもの』

今朝早くから此處に來て、光二は姉の姿を見落すまいとして居たのである。

『御免よ、待遠しかつたでせう』

『ウ、ン――もう切符も買つといたよ。君、氣の毒だが、これで荷物を預けて來て呉れたまへ』

青色の切符を渡して、光二は十三の子供とは思はれぬ程大人びた調子で、何彼を車夫に云ひつけた。久留米絣の筒袖に、白つぽい小倉の袴をキチンと穿いた、見るからに快活らしい弟の樣子を居ると妙子は何とは無しに呼んで見たい心地がした。

『光ちやん！』

『何だい？』

振り返つた光二も懷かしげな眼をあげた。

『母樣は如何してらつしやるだらうねえ？』

『……』

『大丈夫だらうかねえ』

『大抵大丈夫だと思ふけれど……』

光二の言葉は濁つて震えた。

『心配だわねえ！』

姉弟は俯向いて眼を伏せた。互にもう慰さめ合ふ言葉も無かつた。

廣い新橋停車場の構内には、事實樂しい夏休暇で歸つて行くらしい角帽の大學生だの、袴姿の女學生達が其處此處に交つて、その人達の顏には、如何にしても押し隱す事の出來ない、若々しい喜悅の色が浮いて居た。

『姉さん、僕斯うして初めて歸省しようとは思はなかつたよ』

光二は姉の耳元に口を寄せて、囁やきながらといきした。

『悲しいわねえ！』

妙子は堪らなく唇を噛んだ。

けたゝましいベルが鳴つて停車場の隅々までも響き渡ると、急に四邊がけしきばんで、戰場のやうに騷立つた。姉弟はその雜沓の中を、はぐれぬやうに寄り添ふて歩いた。

空いた箱を見つけて、窓際の處に二人並んで席を取ると、又そつと顏を見合つて淋しく笑つた。

ピーと絹を裂くやうな鋭い汽笛が鳴つて、列車が動き出した。妙子は燃えつくやうな頬を窓ガラスに押し當てゝ、わざとに光二の視線をさけた。（完）